

第百二十九話 陸軍の良心を体現 今村大将

海軍は開明的・理性的そして良心的であり、陸軍は横暴で知性の欠片もなく狂信的であると思われているようだが、果たして陸軍の将兵全てがそうだったのだろうか？“一事をもって万事を量る”の類であると思う。その陸軍の良心を代表するのが今村均大将ではなからうか？武士道的日本軍人の典型とも、ストイック過ぎ、自省が強すぎとも、徳の人・情の人、人情家で温厚・篤実等々と評される。当然、部下にも慕われた。

1 今村均大将来歴

1886 (M19) 年 宮城県仙台市生まれ 陸士 19 期

歩兵、英大使館付武官等 参謀本部作戦課長、第 16 軍司令官として蘭印作戦指揮

1942 (S17) 年 11 月から第 8 方面軍司令官 司令部ラバウル (ニューブリテン島)

戦後戦犯 (禁固 10 年) 1968 (S43) 年 10 月逝去 (享年 82 歳)

(以下代表的なエピソードを幾つか)

2 満州事変勃発時の参謀本部作戦課長として

- ・ 関東軍の独断と朝鮮師団の越境に軍事課長永田鉄山と共に反対
- ・ 関東軍との折衝のための渡満した際 板垣征四郎 (士 16) 高級参謀や石原莞爾 (士 21) 参謀に面罵され激怒し酒席から退席
- ・ 後に反省して曰く、厳罰に処すべきだったと、後の下克上に繋がったと指摘



3 蘭印作戦 (1942/1/11~3/9) の指揮 (第 16 軍司令官) とその後の軍政

- ・ パレンバン空挺作戦を指揮し、ジャワ上陸作戦では 9 日間で約 10 万の連合軍を無条件降伏
- ・ 停戦時、蘭印軍司令官停戦条件交渉 強圧的でなく、礼を尽くした話し合い
- ・ 攻略後、政治犯 (インドネシア独立運動の指導者) を解放、各種施策により独立運動を支援、独立歌のレコード制作配布
- ・ 攻略石油精製施設の復旧、石油価格の半額化、学校建設等、治安維持に努力等寛容な軍政を実施
- ・ 軍政の基本指針 家族同胞主義で、徹底した融和政策を採ると幕僚に
- ・ 寛容な軍政に対する批判があるも、示された「占領地統治要綱」の趣旨 (“公正な威徳で民衆を悦服させ”) を引用して要綱を改正する前に自分を免職せよと抵抗

4 ラバウル守備隊の指揮官 (第 8 方面軍司令官) (1942/11/20~終戦)

- ・ ラバウルの要塞化 (堅固な地下要塞、工廠等) → 米軍はラバウル攻略回避
- ・ 自給自足体制の強化 自らも率先して畑仕事 → 現地自活可能な態勢完成、備蓄

5 戦犯と減刑

- ・ 8 方面軍司令官としての責任 死刑が、現地住民の証言などにより禁固 10 年に (スカルノによって減刑)
- ・ 16 軍司令官の責任 オランダ軍による裁判で無罪
- ・ 1949 年巣鴨拘置所収監 → 元部下が劣悪な南方で服役しており、マヌス島収容所行きを希望し、マ元帥は真の武士道に触れたとしてその希望をかなえた。
- ・ 刑期満了帰国後：一隅の謹慎小屋 (3 畳) に自らを幽閉し、反省、質素な生活、回顧録の印税を遺族のために用いた。

6 回顧録に

- ・ 陸大教育の弊害を指摘、政治に口だすべきではないと批判

* 大将の高潔な人格は如何にして育まれたものなのか。大将のエピソードから窺われる姿は、在りうべき武士道的日本軍人である。人格識見ともに優れた多くの陸軍将兵が存在していたのは事実であると確信する。

(第百二十九話 了)